

令和6年度の学校支援プロジェクトの一部紹介

上 越 市

授業を基盤とした学級づくり

～目標と学習と評価の一体化を軸として～

本プロジェクトは、めあてをもち主体的に課題に取り組む子の育成に向けて、教師と子どものそれぞれに手立てを講じた。子どもへの手立てとして、A小学校の目指す主体的に学ぶ子どもの姿について学校と共通理解を図り、実践を行った。その結果、目指す主体的に学ぶ子どもの姿に近づいた。また、教師への手立てでは、授業分析シートを用いた主体的に学習に取り組む時間の測定を行った。結果として、客観的データをもとにしたリフレクションにより、教師自身が学習者主体の学習時間の意義を再確認する姿が見られた。

ポジティブ行動支援が

学級のルールの定着に与える影響についての事例研究

本研究の目的は、ポジティブ行動支援が、学級のルールの定着にどのような影響をもたらすかを明らかにすることである。連携期間を4期に分け、それぞれの期間で担任の願い、院生の観察をもとに1つずつ学級のルールを設定した。設定したルールを定着させるために、ポジティブ行動支援におけるABCフレームをベースに活動を行った。その結果、設定した学級のルールの定着が図られ、WEBQUにおけるソーシャルスキル得点や承認得点に有意な上昇が見られた。また、児童の観察や振り返りからも学級の変容を確認することができた。

キャリア教育の視点をもった総合的な学習の時間の実践

～「郷土愛」を中心として～

本研究は、連携校における「郷土愛を高めたい」という課題に対して、キャリア教育の視点をもった総合的な学習の時間を考案・実践することによって解決策を見出すこと、教育現場でのキャリア教育の実践を促進することを目的とした。キャリア教育の視点を踏まえて、総合的な学習の時間(10時間)の実践を行った。その結果、記述式アンケートにおいて、事前アンケートよりも事後アンケートでふるさとに対する肯定的な視点や感情を表現するような記述が多く見られるようになっていた。本研究により、キャリア教育の視点をもった授業実践は、「郷土愛」を高めることに有効であることがわかった。

継続的なペアコミュニケーション活動を通して

互いにエンパワーアする生徒の育成

～協同学習とファシリテーション技術に基づいて～

本学校支援プロジェクトでは、協同学習とファシリテーション技術を取り入れた英語授業実践を行い、生徒が継続的に英語によるペアコミュニケーションで成功体験を積むことで、心理的安全性を高め、主体的にコミュニケーションを図り、互いにエンパワーアする生徒の育成を目指した。その成果の検証として事前と事後の質問紙調査と振り返

りの記述をもとに生徒の変容を分析した。その結果、本実践により、生徒の心理的安全性が高まり、失敗や間違いを恐れずに、対話を重ねることで、共に学び合う意識の向上が確認された。

主体的学びが生成する

読書活動・読書コミュニティの支援

連携協力校である上越市立B小学校の研究主題「子どもが主体的に学ぶ授業づくり～読書が促す、資質・能力の発揮と伸長～」を具現するため、一年次研究である本研究では、子どもの姿の見取りや先行研究の考察を通して、読書活動と読書コミュニティの両側面について考究した。子どもが本来もっている資質・能力を発揮・伸長している姿として、「自ら進んで読書に親しむ姿」や「他者と関わりながら読書する姿」が捉えられ、その要因を分析・考察することにより、主体的な学びが生成する読書活動づくりや読書コミュニティづくりに資する要件を抽出・整理することができた。

授業におけるICT利用の推進

～Google Workspace for Educationを用いて～

本支援では、新潟県の情報活用能力体系表を用いた意識調査を中心に、授業支援や学校全般の支援を行った。意識調査では、教員の指導意識の自己評価に対して、児童が身に付いていると思われる能力の評価は、同等または低い評価が付けられ、教員の指導と児童の実態には差があると教員が感じていることが明らかになった。また、情報活用能力体系表自体の解釈や、児童に能力が身に付いているかどうかの見取り及び評価に困難さや課題があることがわかった。これらの結果を基にデジタル体系表を作成し、学校へフィードバックした。これにより、児童の実態に合わせ掲載した事例を各学年で活用することで、学校全体で体系表に沿った実践が行われ、ICT利用が増加することが期待される。

CLD生徒の意義ある教科学習のために

上越市立C中学校には、外国にルーツがあり、文化的・言語的に多様な背景を持つ生徒(以下、「CLD生徒」)が9人在籍する。そこで本チームは「CLD生徒の教科学習の質の向上」を共通課題として、授業での学習支援や補助教材の作成などに取り組んだ。その中で出会ったある生徒は、友人を作り、自らの進路に向き合って、日本語を自律的に学ぶようになった。その姿からは、表面的な学習支援のみならず、他者と学ぶ機会をつくる重要性も見いだされた。また、個別課題として、①「教師の話し言葉に対する言語学的分析(研究継続中)」②「多言語メモの活用による社会科授業の理解—異文化背景を持つ生徒の学習サポート」③「補助資料の作成による学習支援」も進めた。

令和6年度の学校支援プロジェクトの一部紹介

妙高市

子ども主体の学びを作り出す授業づくり

本プロジェクトの目的は、D小学校の研究主題である「『自分の学び』を作り出す子どもを育てる～自ら踏み出し、仲間と共に歩み続ける単元の開発～」の達成に向けて、子ども主体の学びの授業デザインの提案を行い、子ども主体の学びを生み出すことである。また、自立と共生を目指すイエナプラン教育の考え方を取り入れた「D小学校型イエナプラン教育」具現のための一方策として、単元内自由進度学習や3・4年生合同学習でのブロックアワーの実践支援を行うこととした。

単元内自由進度学習については、算数科で授業実践を行った。安心して学べる環境が形成される中で、実践を通して自分から挑戦しようと意欲的に取り組んだり、おもしろさ・楽しさを感じたりする子どもが増えた。さらに、子ども自身が学習のゴールを理解し、学びの見通しをもつための単元進度表を取り入れたことで、自分の学びを確認したり、振り返ったりすることができた。また、ブロックアワーの実践は、児童にとって初めての取組であったが、自分の学びと学習環境を選択し、自分自身で学習を調整しながら学びに向かう姿が実践を通して確認された。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するICT機器の活用と個別最適な学び

本プロジェクトの活動テーマは、「『主体的・対話的で深い学び』を実現するICT機器の活用と個別最適な学び」である。テーマに迫るために、3つの手立てを講じた。1つ目は、職員研修会の実施、2つ目は、ICTを活用した授業実践、3つ目は、ICTの活用支援である。ICT研修会の実施により、教職員のICT活用に対する理解が深まり、個別最適な学びの実現に対する意欲の向上につながったことが示唆された。ICTを活用した授業実践では、タブレット型端末を活用した単元内自由進度学習や、振り返り活動により、学習意欲の向上がみられた。また、ICTの活用支援では、教職員に向けて活用事例の紹介や手法の教示を行うことで、ICT活用への意欲が高まり、授業改善や校務の効率化の一助となることが示唆された。

糸魚川市

地域教材を活用した中学校社会科地理的分野の授業開発 —クリーンエネルギーを活用した地域のエネルギー政策の検討を通して—

本報告の主たる目的は、地域素材を教材化した授業を開発・実践し、生徒の地域特性への認識を深めることである。そして、その成果と課題を検討し、次年度以降も支援校で実践できるようにすることである。この結果、以下のような成果があった。まず、実際に地域のエネルギー施策である「新エネルギービジョン」を教材化し、授業開発・実践で

きたこと、そして実践の中で外部人材である市役所職員のかたを活用した活動ができたことである。結果として生徒が学習のねらいである地域特性の理解に留まらず、地域住民とのつながりを深めたり、地域の将来を担う人材として成長したりする機会とすることができた。課題としては教材に対する知識と時数が不足がちであった点があるが、教科・単元横断的な実践を通しての対応の検討を継続していく必要があると考える。

技術科における一人一台端末を活用した他者参照の学び

学校支援の目的は、技術科において生徒らが相互に意見を交換する活動や自己決定の場面を増やす学習ができる授業形態の提案を行い、技術科における一人一台端末を前提とした他者参照が学習にどのような影響を与えるのか授業での姿とアンケート調査を通して考察した。調査の結果、iPadの利用に課題点がみられるものの、授業の中で生徒が自己決定を行うことで前向きに学習に取り組むことがわかった。

柏崎市

技術授業や学習評価におけるICT活用支援

学校支援の主な目的は、技術の授業や学習評価におけるICT活用支援である、生成AIを活用した生徒の学習評価の研究や双方向性のあるコンテンツのプログラミング学習と生成AIとを掛け合わせた授業研究を行った、この結果、生成AIを活用した学習評価については、精度の高いシステムを研究することができた。また、双方向性のあるコンテンツと生成AIを掛け合わせた授業実践では、プログラミングや生成AIという先端技術への興味関心の向上を見取ることができた。

音楽科を専門としない教員の授業観の転換

—思いや意図をもって表現する資質・能力を引き出す

音楽科の実践と提示—

本学校支援の目的は、「校内音楽発表会のサポート」と「音楽科を専門としない教員の音楽授業支援」の2点であった。両者に共通する課題は、子どもたちに音楽活動の目的や意義を十分に理解させていないこと、一斉指導や技術指導に偏り、個々の児童の特性やニーズを十分に考慮しない指導アプローチにあると捉えた。そのため、本研究では音楽科の授業において「思いや意図をもって表現する力」の育成を目指した実践を行った。具体的には、ポートフォリオを活用した振り返りや録音を使った自己評価を通じて、児童の表現力向上を図った。その結果、児童は楽曲の感情や意図を理解し、それを音楽的に表現する姿勢が見られ、学びの振り返りが学習意欲を高め、自己評価により表現力の改善が進んだ。